

労働の考古学

―セバスチャン・サルガードのまなざし― 沈黙の力―

町北 朋洋

〔労働経済学〕

●セバスチャン・サルガード
『人間の大地 労働』（岩波
書店、一九九四年、品切れ）

読み進めていくうちに、映画館のなかにいるような気になる。一ページたりとも休ませてはくれない。私もあなたも知らない土地で、無名の人物がただ、黙って働いている。ページをどこまでめくっていても、それだけだ。労働があるだけだ。世界中の肉体労働があるだけだ。本書には言葉が出てこず文章もない。したがって巧みな論理と構成による明快な主張はない。宣言や声明もない。あるのは自然と機械を相手にした世界中の肉体労働の姿だ。有史以前、文字を持つ前から人間が行ってきた、今や消えつつあるが、決して無くなりはない肉体労働を写し撮った作品ばかりだ。

筆者が研究する労働経済学とは、

一国の経済システムを所与として、そこでの人間の働き方を考え抜こうとする学問だ。労働経済学者が経済システムと労働の姿を理解しようとするとき、その道は未だ平らではない。人々の働き方、つまり人間らしさを理解するための新しい道具が必要だ。その新しい道具の世界に皆さんを案内しよう。本格的な研究書や活字から金言を得たかったと残念に思われるかもしれない。写真家がヒントを与えてくれる。躊躇や心配は無用だ。

●労働観を暴く鏡

ここで紹介する本は一九八〇年代に四〇カ所で撮影された作品と一〇ページ程度のエッセーからなる約四〇〇ページという大部の写真集だ。とうてい片手では持てず、気軽に立ち読みすることなどできない。この重たい写真集は腰を据

えてじっくり向き合うことを必要とするものだから、図書館や自宅のなかでも出来るだけ広い机をみつけて欲しい。そこで本書を広げれば、読者の皆さんが一生出会うことすらもない人々が白黒の姿で立ち上がってくる。

そこにはバングラデシユの廃船処理の姿がある。今にも崩れそうな繊維工場がある。ブラジルの金鉱の奥深くでうごめく数万の男たちがいる。運河の造成のため瓦礫を運び、鉄を振り降ろし土地を削り続けるインドの女がいる。有毒ガスのなかで硫黄の塊を背負うインドネシアの男たちがいる。スペインとイタリアの漁師がいる。湾岸戦争後も燃え続けるクウェートの油井を消火するため世界中から派遣された専門家がいます。イギリスとフランス双方から掘り進められた鉄道で働く両国の技師がいる。

造船所、製鉄所、自転車・自動車製造工場で働く男と女がいる。そこにはオフィスビルはない。コンピュータに向かう人間はいない。自動化が進んだ工場の夜景はない。そこには奇妙に姿を変えられた大地の不自然さがあり、そこで大地を削り、黙々と働く人間がいるだけだ。

写真家サルガードが切り取ったものは何か。本書のエッセーにあるサルガードの言葉を引用するのが一番だ。「本書は労働者への讃歌であり、ゆつくりと消え去りつつある肉体労働の世界への告別であり、そして何世紀にもわたって働き続け今も働くあちらの男たち女たちへの贈り物である」。

本書の連作が悲惨で虐げられた労働ばかりを捉えていても、人間はその環境に完全に従属しているわけでもないことが多くの作品から浮かび上がってくる。そこではロボットや人工知能が入り込む余地のない過酷な環境で人間が自然と闘い共存している。悲惨で虐げられているとってしまったのは、それは人間の肉体労働に対する侮蔑に通じるだろう。彼の作品は読者自身に潜む労働観を暴き出す鏡のようだ。

しかしながらサルガードは、人間は自然から独立できるわけでも、自然や経済システムを支配できるわけでもないという厳格な事実も切り取る。労働とは自然や経済システムへの従属でも、そこからの独立でもなく、人間が文字を持つ以前から、この従属と独立の間で折り合いをつけるものであったことをサルガードの作品は教えてくれる。本書によって、筆者は次の考古学的仮説を得た。人類は肉体労働を通じて人間らしさを獲得してきたというものだ。

●批判精神―沈黙の力

ブラジル出身のサルガードは一九四四年生まれ。彼の自伝『わたしの土地から大地へ』（河出書房新社、二〇一五年）によると、一九七三年に報道写真家として身を立てる前に、フランスで経済学の学位を得て、アフリカのルワンダでコーヒー農園の経営指導に当たっていた。サルガードの問題意識の核心は、貧しい国々の最も貧しい人々の労働を写し撮ることで、人間理解を一步進めようとするところにある。肉体労働の観察を通じて、一国の経済システムの姿を捉まえようとするところにある。

サルガードの問題意識は、太古からある肉体労働の姿を世界中の人々に示すことで、国の間の経済システム同士のつながりを静かに連想させるところにある。労働をめぐる問いを作り、共有しようとするところにある。活字と違い写真は叫ばない。したがって写真は活字よりも人に考えさせる力を持つ。読書は自分の頭で考えず他人に考えてもらおう性格の強いものだが、写真集は読者に自分の頭で考えることを強いる。言葉がない分、読者はより深くサルガードの沈黙の力を体験する機会が得られる。

ブラジルの金鉱セーラ・ペラーダを写し撮った最も有名な連作を取り上げよう。金鉱では、土を掘って砂金を取り出した後、掘り出された土砂を金鉱の外に出す必要がある。このため、労働者が砂袋を背負って土砂を金鉱の内側から外側に運ぶ必要がある。数万の労働者が何十メートルもある梯子を垂直に上っていき、土砂を金鉱の外まで持つていく様子を切り取るところから始まる。

遠くからの写真からは、それが人間なのか、何か壁に張り付いた突起物なのか、まず判別はできない。近づいてみよう。それぞれの

泥まみれの砂袋に二本足が付いているようにみえる。やはり人間だ。数えきれないほどの二本足がうごめいていた。この連作のハイライトは、金鉱の斜面にいる二人だ。片方は警備兵だ。もう一人は警備兵と対峙する半裸の労働者だ。警備兵のライフルの銃身を片手で握りしめ、もう片方で拳を作っている。銃を持たない労働者が優勢のようにみえる。一九八〇年代の労働の姿とは思えず息が止まる。

本書の魅力と獨創性はサルガードのまなざしにある。それは人文・社会科学の背骨でもあり、良質な経済システムを追求するための批判精神だ。「歴史はなによりも、たえまない挑戦と反復と忍耐の連鎖である。それはめぐりくる抑圧と屈辱と災難の周期であるが、一方でそれは人間の生存に向けての能力を次代に伝える遺言でもある。」という冷静な分析がある。同時に「歴史のなかにはいかなる孤独な夢もない。なぜならある一人の人間のなかで懐胎かいたされた夢は、次代の人の人生のなかで呼吸し始めるからである。」という希望も示されているのだ。

●おわりに

労働経済学者が国の間の経済システム同士のつながりを理解するための道は未だ平らではない。パングラデシユで起きた縫製工場ビル倒壊事件を受け、二〇一五年の主要七カ国（G7）サミットでは「責任あるサプライチェーン」の構築の必要性が提唱された。これは「グローバルサプライチェーンにおける労働者の権利、人間らしく働きたいのある労働条件」の追求というものだ。

しかし、「責任あるサプライチェーン」の「責任」とは何を指すのか、人間らしい働きがいとは何なのか。問題を再定義し、労働と産業の地理的分布を司る論理を徹底的に考え抜くしかない。その論理の妥当性を確認し続ける他ない。サルガードの写真集を広げるとは、厳しい自然と経済システムの間で闘う人間の姿を目撃することで自身の労働観に揺さぶりをかけることだ。それは良質な雇用を創出する経済システムの論理を考え抜く批判精神を心に宿す一歩なのだ。

（まちきた ともひろ／アジア経済研究所 経済統合研究グループ）